

各関係機関団体の長 殿
各病虫害防除員

福岡県病虫害防除所長







平成22年度病虫害発生予報第5号(8月)について

このことについて、病虫害発生予報第5号を発表したので送付します。

ウンカ類の発生に注意しましょう!

本年は、梅雨期間におけるウンカ類の飛来が多くなっています。
トビイロウンカは、発生初期には低密度でも急激に増加するため、発生パターン図を参考に、必ずほ場での発生状況を把握し、適期(若齢幼虫発生期)防除を徹底しましょう。

トビイロウンカとセジロウンカの見分け方

ウンカの種類	若齢幼虫 (体長1~2mm)	老齢幼虫 (体長2.5~3.5mm)	成虫
トビイロウンカ			 短翅型(雌)
セジロウンカ			

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は、以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の気温は平年より高いでしょう。降水量と日照時間は平年並でしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	10	30	60
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

(福岡管区气象台 22年7月23日発表抜粋)

予報第5号

向こう1か月間の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	いもち病(葉いもち) 紋枯病 トビイロウンカ コブノメイガ 斑点米カメムシ類	やや少 少 やや多 並 少	並 少 やや多 並 やや少	やや多 やや多 やや多 並 やや少
大豆	ハスモンヨトウ	少	少	少
かんきつ	黒点病 ミカンハダニ	並 多	並 多	並 多
なし	ナシヒメシンクイ	やや少	やや少	やや少
ぶどう	べと病	並	やや多	多
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ ハマキムシ類	並 並 少	並 やや多 やや少	やや多 やや多 並
果樹共通	カメムシ類	並	-	並
茶	炭そ病 輪斑病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャノホソガ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ	少 並 少 並 少 やや少 少	やや少 並 並 やや多 やや少 少 少	やや少 多 並 並 やや少 少 少
イチゴ	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類	並 多 並	並 多 並	並 多 並

注) 果樹共通カメムシ類の発生量(現況)は、前年比

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生
の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物 - 水稻】

1 いもち病（葉いもち・穂いもち）

（1）予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

（2）予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少
なかった（ - ）。

発生ほ場率 21.3%（平年 18.1%、前年 9.6%）

発病株率 3.7%（平年 5.7%、前年 3.2%）

イ 7月2半旬調査の結果、山間部の一部で多発ほ場が認められた（ + ）。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（ - ）。

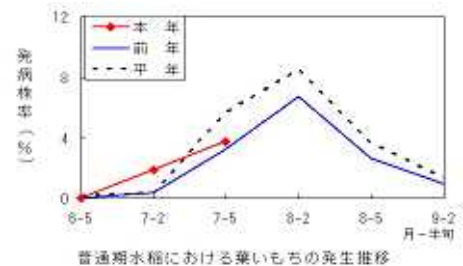
（3）防除上の注意

ア 葉いもちが発生しているほ場では、薬剤防除を徹底するとともに、適切な肥培管理に努め
る。

イ 穂いもちに対する薬剤防除を実施する場合、剤型によって散布時期が異なるので注意する。
粉剤は出穂期前、粒剤は出穂期2週間前に処理する。

ウ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。

エ 薬剤は「平成22年度普通作病害虫・雑草防除の手引き」を参照する（以下の病害虫につ
いても同様）。



2 紋枯病

（1）予報の内容

発生量：平年より少、前年よりやや多

（2）予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なか
った（ - ）。

発生ほ場率 4.3%（平年 11.3%、前年 1.9%）

発病株率 0.4%（平年 1.2%、前年 0.0%）

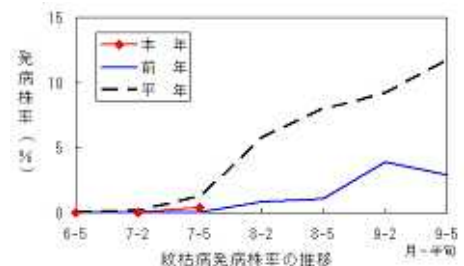
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（ + ）。

（3）防除上の注意

ア 出穂期以降に上位葉へ病斑が進展するのを防ぐため、発生ほ場では防除を実施する。
粉剤は出穂期10～14日前の防除効果が高い。

イ 粒剤は薬剤によって使用時期（収穫前日数）が異なるので、使用基準を確認する。

ウ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。



3 トビイロウンカ

（1）予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

（2）予報の根拠

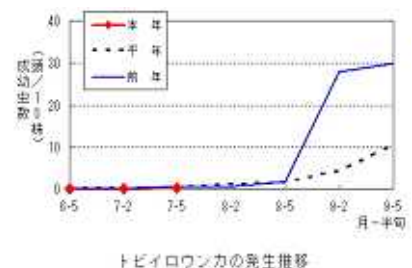
ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多か
った（ + ）。

発生ほ場率 23.4%（平年 14.4%、前年 11.5%）

10株当たり成幼虫数 0.3頭（平年 0.3頭、前年 0.3頭）

イ 県下5地点の予察灯による7月4半旬までの誘殺虫数
は、74頭（平年 19.2頭、前年 3.0頭）と多かった（ + ）。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（ + ）。



(3) 防除上の注意

- ア 発生初期には低密度でも急激に増加するため、発生パターン図を参考に必ずほ場での発生状況を把握し、適期（若齢幼虫発生期）に防除を行う。
- イ 箱施薬剤が施用されたほ場でも、効果がなくなっている場合があるため、発生状況を十分に把握する。
- ウ 本種は株元に生息しているため、防除薬剤が株元に十分かかるように丁寧に散布する。

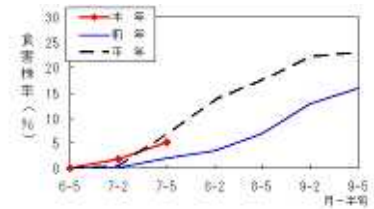
4 コブノメイガ

(1) 予報の内容

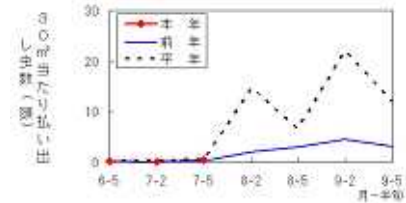
発生量：平年、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月5 半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
発生ほ場率 44.7%（平年 50.3%、前年 41.2%）
食害株率 5.2%（平年 6.8%、前年 1.9%）
30㎡当払出し成虫数 0.4頭（平年 0.4頭、前年 0.2頭）
- イ 向こう1 か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（+）。



コブノメイガの食害株率推移



コブノメイガの発生推移

(3) 防除上の注意

- ア コブノメイガの防除適期は、発蛾最盛期から1 週間後である。
- ア 本種はトビイロウンカと同時期に飛来していると考えられるので、発生パターン図を参考にトビイロウンカとの同時防除を行う。

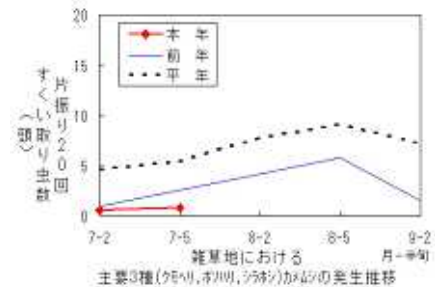
5 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

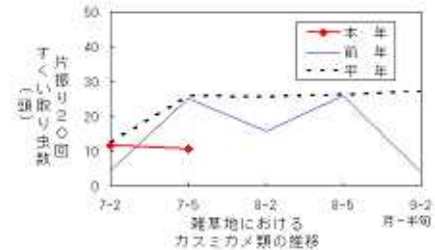
発生量：平年、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

- ア 7月5 半旬における雑草地での20回すくい取り調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。
主要3 種カメムシ類（クモリカメムシ、ホリハリカメムシ、シラホカメムシ類）
発生ほ場率 23.5%（平年 59.6%、前年 51.2%）
すくい取虫数 1.0頭（平年 5.4頭、前年 2.6頭）
- カスミカメ類
発生ほ場率 50.0%（平年 59.4%、前年 63.4%）
すくい取虫数 3.8頭（平年 25.6頭、前年 25.1頭）
- ミナミアオカメムシ
発生ほ場率 2.9%（平年 3.0 %、前年 2.4 %）
すくい取虫数 0.03頭（過去5 か年平均 0.03頭、前年 0.02頭）



雑草地における主要3種(クモリ,ホリハリ,シラホ)カメムシの発生推移



雑草地におけるカスミカメ類の推移

- イ 県下5 地点の予察灯における7月1 半旬～4 半旬までの誘殺虫数は、平年よりやや少なかった（-）。
ミナミアオカメムシ 6頭（過去5 か年平均 36頭、前年 62頭）

アカスジカスミカメ 584頭（過去5 か年平均 662頭、前年 405頭）

- ウ 向こう1 か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（+）。

(3) 防除上の注意

- ア 畦畔や休耕田などの草刈を徹底し、出穂期2 週間前までに終了する。
- イ 防除適期は、穂揃期及びその7～10日後である。
- ウ 出穂期の早いほ場では集中的に加害される恐れがあるため、発生状況に注意する。
- エ ミナミアオカメムシに対しては、シラフルフェン剤の防除効果が低いので、効果の高いクロチアニジン剤またはジノテフラン剤等を使用する。

【普通作物 - 大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 筑紫野市の7月1半旬～4半旬のフェロモントラップにおける誘殺虫数は

筑紫野市 7頭(平年 506頭、前年 269頭)

柳川市 540頭 (前年 1282頭)と少なかった(-)。

行橋市 114頭 (前年 718頭)

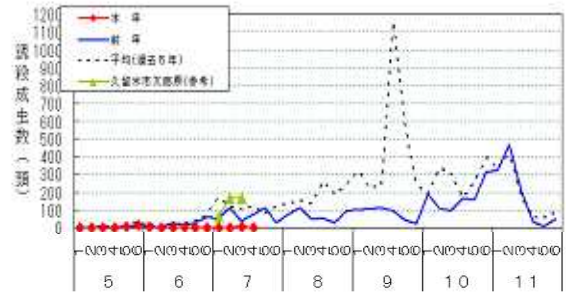
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上の注意

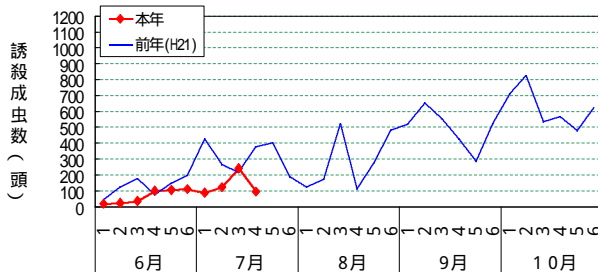
ア 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は、見つけ次第除去する。

イ 薬剤散布は、防除効果が高い若齢幼虫期に実施する。

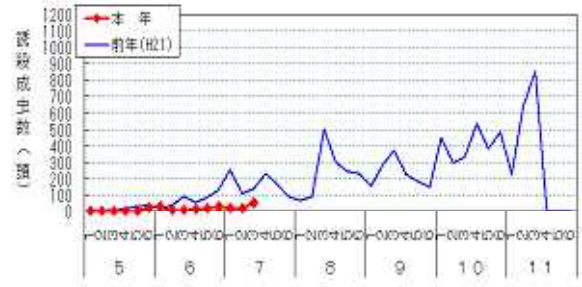
ウ 防除適期は、フェロモントラップの誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって差があるので、若齢幼虫の食害で生じる白変葉の発生状況を必ず確認する。



フェロモントラップによるハスモンヨトウ誘殺虫数の推移(筑紫野市) 月-半旬



フェロモントラップによるハスモンヨトウ誘殺虫数の推移(柳川市) 月-半旬

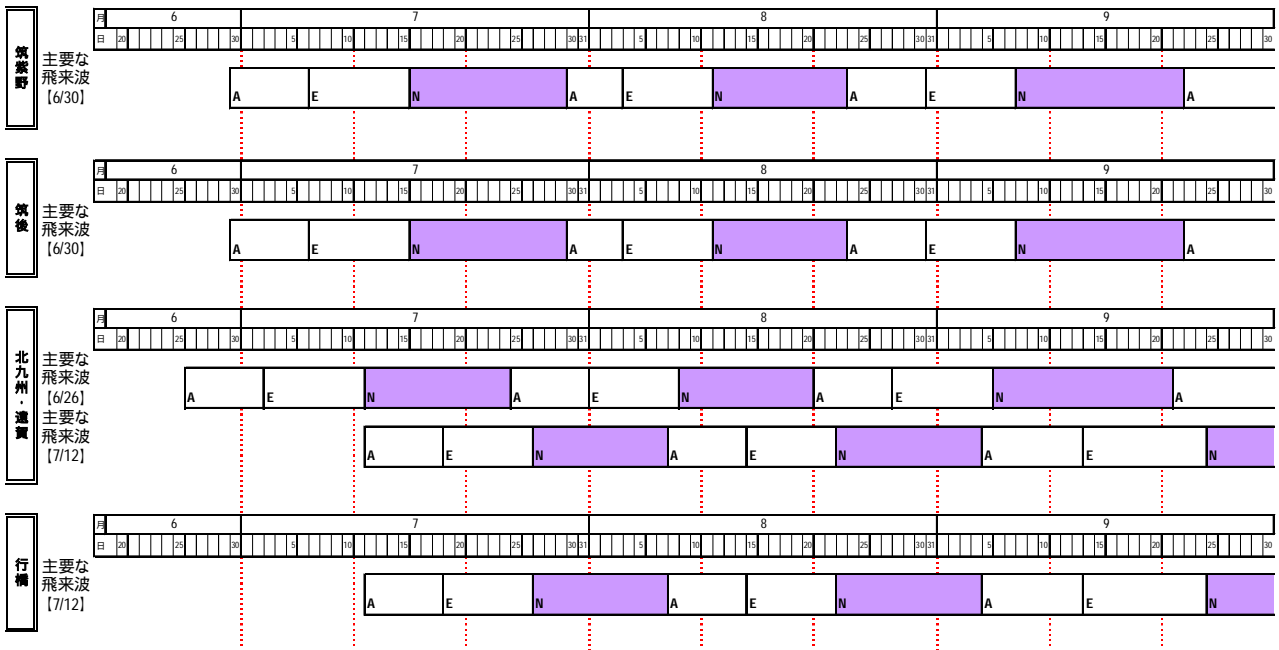


フェロモントラップによるハスモンヨトウ誘殺虫数の推移(行橋市) 月-半旬

【普通作・その他の病害虫】

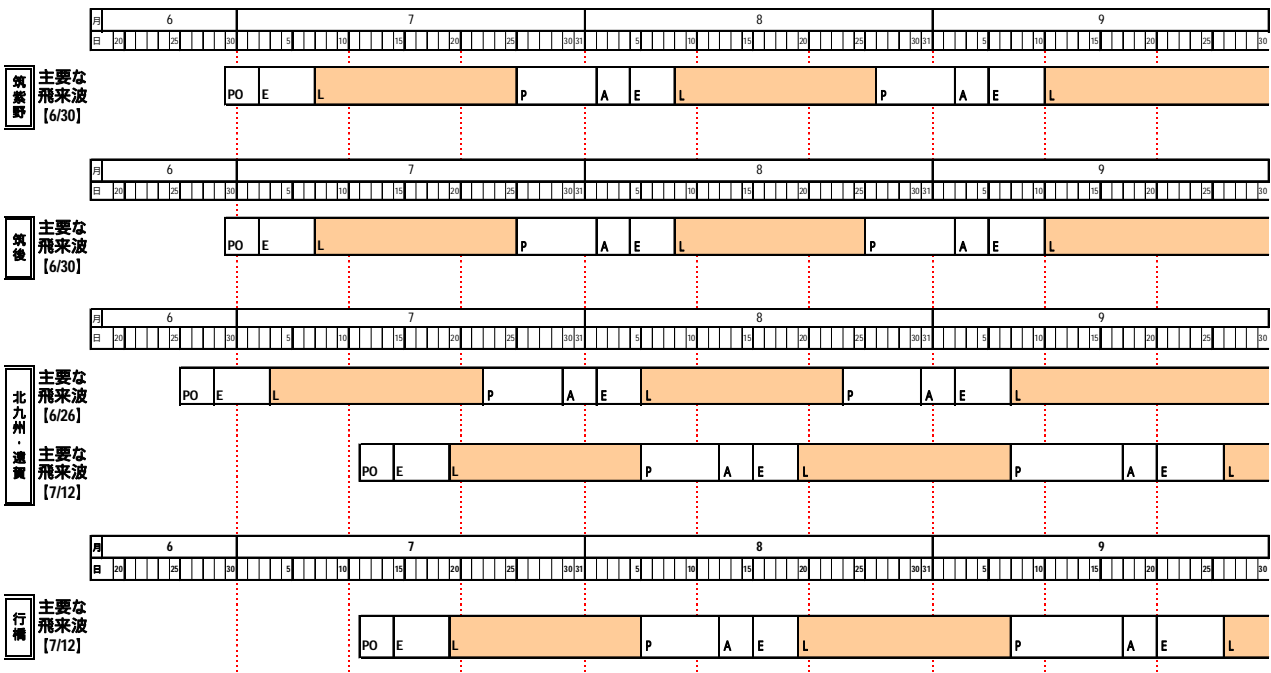
作物名 病害虫名	発生量(現況)		発生量(予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比		平年比	前年比	
普通期水稻 セジロウンカ	やや多		やや多	やや多	<p>セジロウンカの発生推移</p>

図 飛来に基づくトビロウカ発生予想パターン図 (平成22年7月26日現在)



- (注) (1) 発育段階
 A:成虫 E:卵 N:幼虫
 (2) 気温は筑紫野:大宰府、筑後:大牟田、行橋:行橋のアメダスの平均気温を使用した
 (3) 平均気温は7月19日までは本年のデータ、7月20日以降は平年値

図 飛来に基づくコブノメイガ発生予想パターン図 (平成22年7月26日現在)



- (注) (1) 発育段階
 PO:産卵前期間 A:成虫 E:卵 L:幼虫 P:蛹
 (2) 気温は筑紫野:大宰府、筑後:大牟田、行橋:行橋のアメダスの平均気温を使用した
 (3) 平均気温は7月19日までは本年のデータ、7月20日以降は平年値
 (4) コブノメイガはウンカ類と同時期に飛来したと推定

表 セジロウンカ及びトビロウンカの誘殺状況(平成22年)

月日	セジロウンカ							トビロウンカ						
	ネットトラップ	予察灯						ネットトラップ	予察灯					
	筑紫野市	筑紫野市	筑後市	行橋市	糸島市	遠賀町	予察灯計	筑紫野市	筑紫野市	筑後市	行橋市	糸島市	遠賀町	予察灯計
5/30	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/17	0	0	22	0	0	0	22	0	0	1	0	0	0	1
6/18	-	1	4	0	1	1	7	-	0	0	0	1	0	1
6/19	-	0	7	5	0	1	13	-	0	0	3	0	1	4
6/20	8	0	10	0	0	1	11	0	0	0	2	0	1	3
6/21	5	0	22	4	0	0	26	0	0	0	1	1	0	2
6/22	2	0	165	4	1	2	172	0	1	1	3	0	0	5
6/23	2	0	19	0	0	1	20	1	1	0	1	0	0	2
6/24	0	0	15	0	0	0	15	0	4	0	4	0	0	8
6/25	-	0	2	0	0	0	2	-	0	0	0	2	0	2
6/26	-	0	0	0	0	111	111	-	0	0	3	0	0	3
6/27	1	0	14	0	2	15	31	0	0	0	1	3	0	4
6/28	0	0	1	0	0	1	2	0	0	0	2	0	0	2
6/29	0	0	19	2	0	0	21	0	0	0	4	2	0	6
6/30	1	0	19	0	8	1	28	0	0	0	2	2	0	4
7/1	1	0	3	3	3	0	9	0	0	0	0	0	0	0
7/2	-	0	4	2	13	6	25	-	0	0	2	1	0	3
7/3	-	0	2	8	12	0	22	-	0	0	1	0	0	1
7/4	0	1	2	1	16	4	24	0	0	0	0	0	0	0
7/5	0	0	3	3	12	6	24	0	0	0	0	2	0	2
7/6	0	0	8	0	7	2	17	0	0	0	0	1	0	1
7/7	0	0	2	0	13	92	107	0	0	0	0	1	0	1
7/8	0	0	2	0	9	8	19	0	0	0	0	0	0	0
7/9	-	0	0	2	3	1	6	-	0	0	0	0	0	0
7/10	-	0	0	2	1	17	20	-	0	0	0	0	0	0
7/11	15	0	1	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0
7/12	3	4	2	170	2	308	486	0	0	2	0	2	0	4
7/13	9	3	6	36	3	21	69	0	0	0	0	0	0	0
7/14	3	2	5	117	0	182	306	0	0	0	1	0	0	1
7/15	0	5	231	20	1	8	265	0	0	8	1	0	1	10
7/16	-	12	87	3	2	3	107	-	0	0	0	0	0	0
7/17	-	6	10	4	0		20	-	0	0	0	0		0
7/18	-	4	2	2	0		8	-	0	0	0	0		0
7/19	5	0	7	50	8		65	0	0	0	0	1		1
7/20	0	1	3	34	5		43	0	0	0	2	0		2
7/21	0	2	5	30	3		40	0	0	0	0	0		0
7/22	0	2	13	2	2		19	0	0	0	0	1		1
7/23	-		5				5	-		0				0
7/24	-		3				3	-		0				0
7/25	0		0				0	0		0				0
7/26	0						0	0						0

【果樹】

1 かんきつ黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 1.3% (平年 2.0%、前年 0.7%)

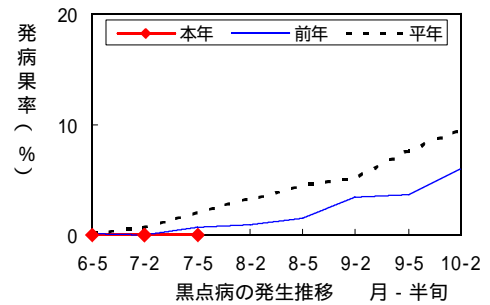
発生ほ場率 40.0% (平年 36.4%、前年 54.5%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温より高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる枯れ枝は除去する。

イ 前回の散布から1か月後を目安に防除を実施する。



2 かんきつのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)

寄生葉率 33.9% (平年 13.0%、前年 12.8%)

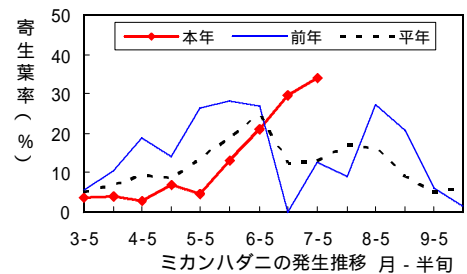
発生ほ場率 81.8% (平年 59.8%、前年 63.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



3 なしのナシヒメシクイ

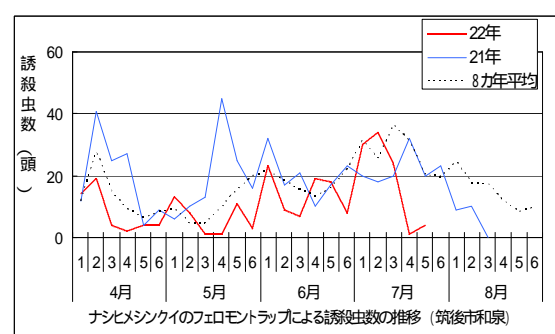
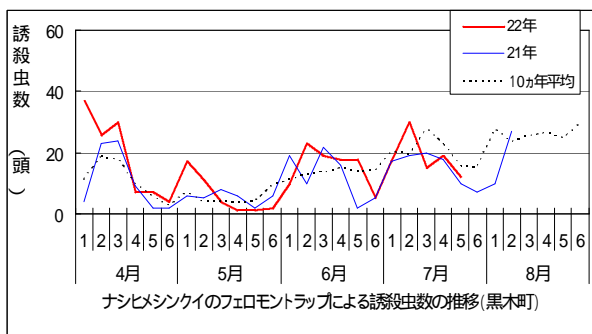
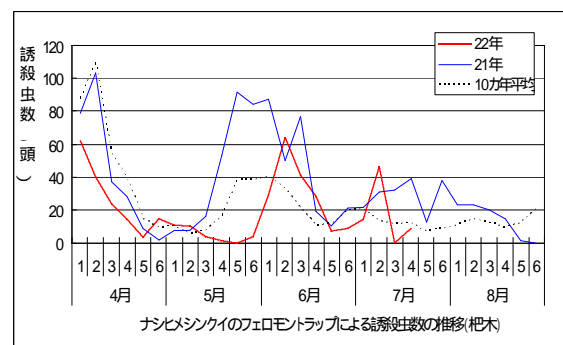
(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 7月1半旬～4半旬までのフェロモントラップの誘殺数は、平年並であった(±)。

県内3か所の平均 73頭 (平年 85頭、前年 96頭)



イ 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

被害果率 0% (平年 0.4%、前年 0.5%)

発生ほ場率 0% (平年 23.7%、前年 18.2%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 8月上～中旬頃の発蛾最盛期直後に防除を行う。

防除後も成虫が多く見られる場合は、7～10日後に追加防除を行う。

イ 幼虫は主に果頂部から食入加害するので、防除に当たっては、果実に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 防除に当たって収穫期に入る品種は、薬剤の選定など農薬使用基準を遵守する。

4 ぶどうべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 7月5 半月調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)。

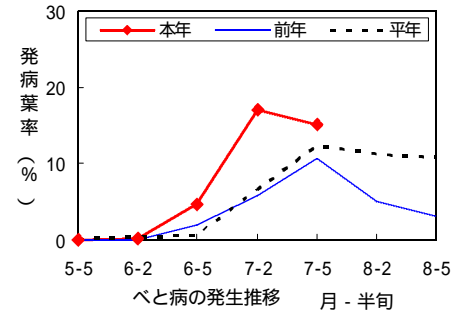
発病葉率 15.1% (平年 12.3%、前年 10.6%)

発生ほ場率 88.9% (平年 68.2%、前年 80.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高低く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア ボルドー液は、降雨直後や散布直後の降雨により、薬害が発生する可能性があるので注意する。



5 かき炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5 半月調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病枝率 0.5% (平年 0.7%、前年 0.1%)

発生ほ場率 21.4% (平年 22.7%、前年 7.1%)

発病果率 0.1% (平年 0.5%、前年 0.1%)

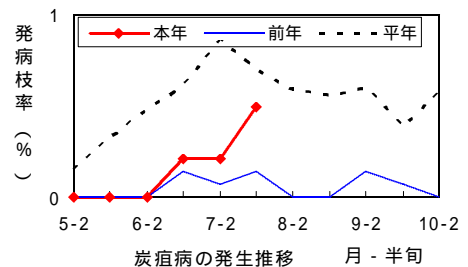
発生ほ場率 7.1% (平年 20.3%、前年 7.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる罹病枝及び罹病果は除去する。

イ 台風等の強風雨が予想される場合、罹病枝の多い園、本病に弱い品種(早秋)では、薬剤防除を徹底する。



6 かきのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5 半月調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生果率 8.7% (平年 8.4%、前年 4.1%)

発生ほ場率 92.9% (平年 79.2%、前年 78.6%)

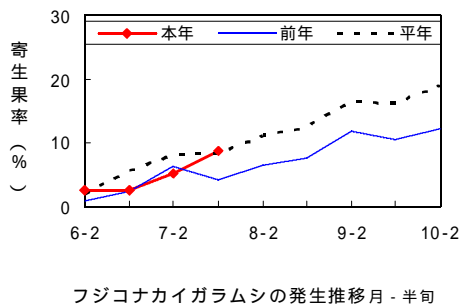
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 薬剤防除の効果が最も高いのは若齢幼虫期であるが、第2世代以降は齢期が乱れているので、園内をよく観察して適期防除を実施する。

イ 防除の際は、ヘタの下や葉と重なった果実表面に、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 合成ピレスロイド系剤は、天敵類に悪影響を及ぼすので、カメムシが飛来している場合を除き使用を控える。



7 かきのハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

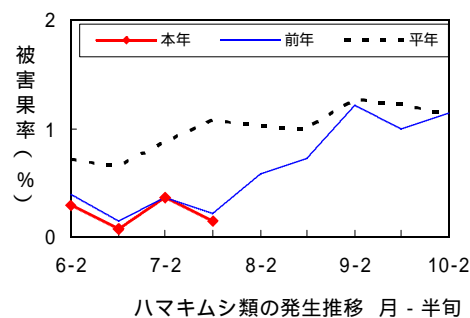
被害果率 0.1% (平年 1.1%、前年 0.2%)

発生ほ場率 7.1% (平年 47.7%、前年 21.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上の注意

防除の際は、ヘタの下や葉と重なった果実表面に、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。



8 果樹共通のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：前年並

(2) 予報の根拠

ア ヒノキの球果量はやや少であった(-)。

イ 7月5半旬における県下22か所のヒノキ球果のピーティング調査の結果、主要3種類のカメムシ類の頭数は、1地点あたり平均9.4頭(筑後支所管内18.5頭)で、前年並の11.1頭(筑後支所管内16.0頭)であった(±)。

ウ 7月1半旬～5半旬までの県下3か所の予察灯におけるチャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ・クサギカメムシの合計誘殺数は1,064頭(前年779頭)で、前年並であった(±)。

エ 7月5半旬調査の結果、被害果は少なかった(-)。

なしの被害果率 0% (平年 0.9%、前年 0.1%)

かきの被害果率 0% (平年 0.7%、前年 0%)

オ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 7月5半旬のヒノキ球果の口針鞘数調査結果から、新成虫がヒノキから離脱し果樹園へ多く飛来する時期は、県平均では8月31日頃(筑後支所管内は8月20日頃)と予想される。

イ ヒノキ球果の口針鞘数が10本を越えている(県内平均3.9本)地点が認められていることと、チャバネアオカメムシの越冬量の地域間差が大きいこと(平成22年3月12日付「技術情報第10号」参照)から、一部の常習発生地やスギ・ヒノキ林に近接する園地では、早い時期からの飛来が考えられるので、果樹園内の見回りを強化し、園内への飛来や果実の落果等の異常を認めたら、薬剤防除を行う。

ウ 樹種によって使用できる薬剤が異なるので、使用基準・使用回数等を遵守する。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生現況	発生予報		防除上注意すべき事項等
	(平年比)	(平年比)	(前年比)	
なし ハダニ類	並	やや多	やや多	・多発すると防除が困難になるので、発生の少ない時期の防除を徹底する。
かき うどんこ病	やや少	やや少	並	・葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
柿 ハダニ	並	並	並	・発生が多い園では、8月上～中旬の防除を徹底する。

【茶】

1 炭そ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

発病葉数 0.8葉(平年 2.7葉、前年 2.8葉)

発生ほ場率35.3%(平年27.0%、前年33.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。

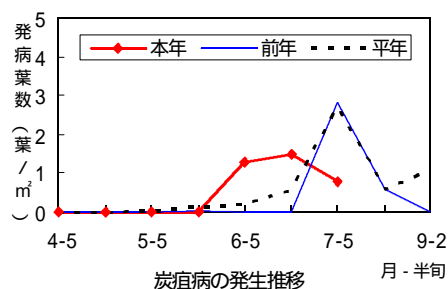
(3) 防除上の注意

ア 摘採・整枝後等の残葉での発生に注意し、萌

芽から1葉期までに防除を行う。特に最終摘採後の新芽(秋芽)に対する防除を徹底する。

イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、降雨前の防除効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 輪斑病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉数 0.2葉(平年 0.2葉、前年 0.02葉)

発生ほ場率29.4%(平年 6.6%、前年 6.7%)

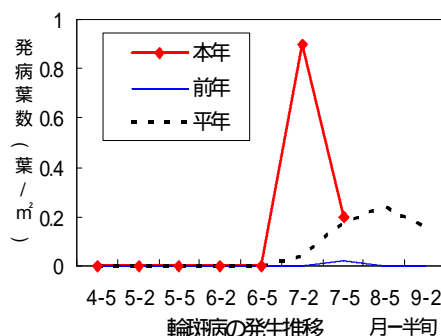
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 病原菌は、葉や茎の傷口から侵入感染するため、三番茶摘採又は刈落とし当日か翌日に防除を行う。

イ 台風等の強い風雨の後では、葉や茎の傷口の増加によって感染が急速に拡大する場合がありますので、降雨後速やかに(翌日までに)防除を行う。

ウ 本病の発生園では、新梢枯死症も発生しやすいので注意する。



3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

寄生葉率 0%(平年 0.5%、前年 0%)

50葉当たり虫数 0頭(平年 0.7頭、前年 0頭)

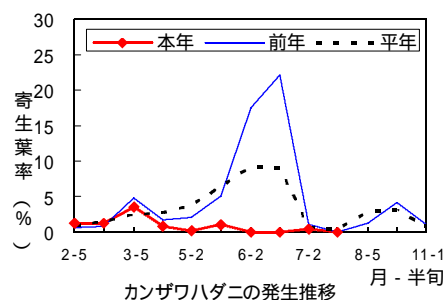
発生ほ場率 0%(平年 9.7%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上である場合は防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

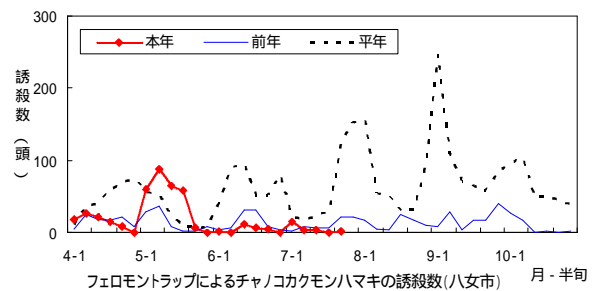
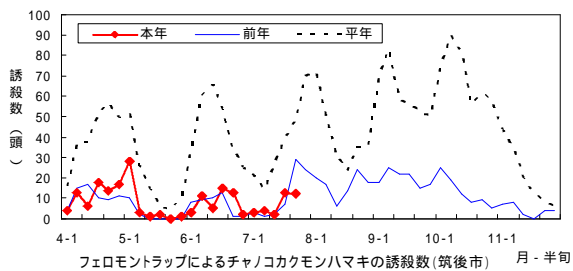
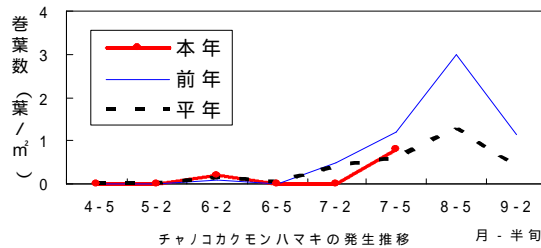
(2) 予報の根拠

ア 7月5日半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

被害葉数 0.8葉(平年 0.6葉、前年 1.2葉)

発生ほ場率41.2%(平年26.6%、前年53.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)



(3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、8月上旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

5 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

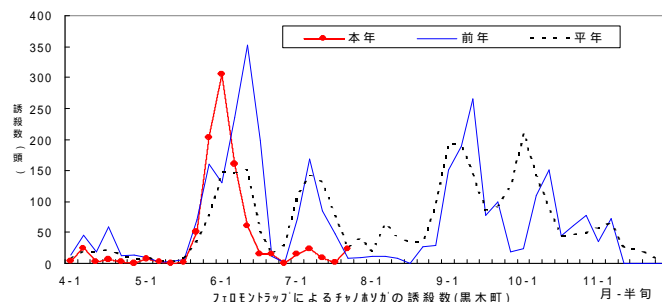
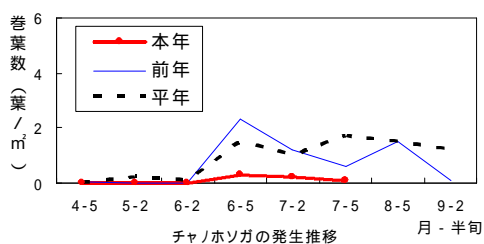
(2) 予報の根拠

ア 7月5日半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

被害葉数 0.1葉(平年 1.7葉、前年 0.6葉)

発生ほ場率 11.8%(平年30.3%、前年26.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)



(3) 防除上の注意

ア 第3世代成虫の発蛾最盛期は、8月中旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

たたき落とし虫数0.4頭(平年 0.7頭、前年 0.9頭)
発生ほ場率 47.1%(平年50.5%、前年53.3%)

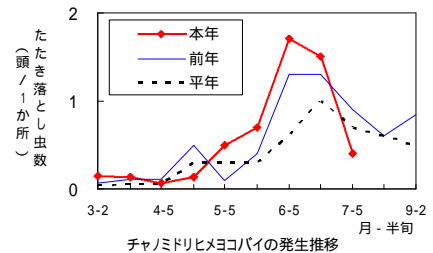
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(-)。

(3) 防除上の注意

ア たたき落とし(A4版白紙上)で4頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。

ウ 効果が高い薬剤が少ないので、多発する前に防除する。



7 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

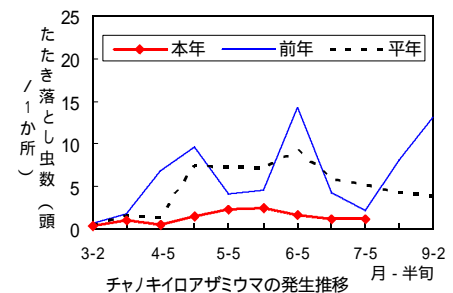
たたき落とし虫数1.2頭(平年 5.2頭、前年 2.1頭)
発生ほ場率 70.6%(平年86.0%、前年73.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上の注意

ア たたき落とし(A4版白紙上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



【野菜】

1 イチゴ(育苗期)うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年(過去6か年平均)・前年並

(2) 予報の根拠

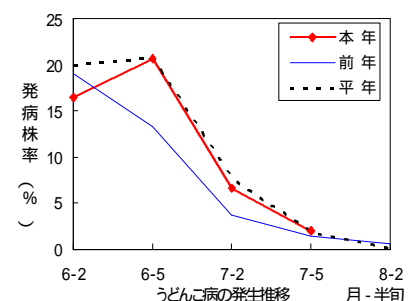
ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
発病株率 2.1%(平年<過去6か年平均> 1.9%、前年 1.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(-)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である罹病葉や古葉は出来るだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。

イ 高温期は病斑が消滅するが、潜在感染株は本ばで発病するので、定期的な予防散布を実施する。



2 イチゴ(育苗期)炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年(過去6か年平均)・前年より多
注意報第3号(7月28日付)を発表

(2) 注意報の根拠

ア 7月2半旬に県下21か所の育苗床の苗から小葉を採取し、エタノール浸漬法による炭疽病の潜在感染株調査を行った結果、

炭疽病潜在感染株率 52.9% (過去4か年平均 18.1%、前年 13.3%)

潜在感染株確認ほ場率 100% (過去4か年平均 65.8%、前年 71.4%)

と、前年及び過去4か年平均より高く、本調査を開始して以来最も高かった(表)。

イ 7月5半旬に巡回調査を行った結果、

発生株率 0.39% (過去6か年平均 0.3%、前年 0.1%)

発生ほ場率 18.2% (過去6か年平均 7.3%、前年 9.5%)

と、発生ほ場率は前年及び過去6か年平均より高かった。

表 エタノール浸漬法によるイチゴ炭疽病潜在感染状況の調査結果

(単位: %)

調査地点		本年	前年
本所	糸島市	40	15
	福津市	15	10
	久留米市1	30	25
	久留米市2	25	5
	筑前町	30	20
	嘉麻市	-	0
	飯塚市	55	5
筑後支所	福智町	85	25
	八女市1	15	0
	八女市2	50	5
	筑後市	85	-
	大川市	75	0
	みやま市	100	0
	大木町	55	15
行橋支所	広川町1	50	0
	広川町2	25	0
	岡垣町1	75	20
	岡垣町2	85	20
	行橋市	26.9	15
	豊前市1	45	10
	豊前市2	85	25
みやこ町	60	65	
潜在感染株率		52.9	13.3
潜在感染株確認ほ場率		100	71.4

注1 調査地点は、イチゴ育苗期定点調査ほ場21か所

1地点20株、1株当たり2~3枚を採取

注2 検定日: 7月12日 調査日7月26日

(28 で2週間静置)

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場をこまめに見回り、発病株及びその周辺株は速やかに除去、処分する。

イ 降雨、台風の前夜や摘葉後に薬剤散布を徹底する。なお、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

ウ 急激な肥効は発病を助長するので注意する。

エ 雨よけビニル及び寒冷紗被覆をしているほ場では、風通しを良くする。

オ 低温処理時の注意事項

(ア) 夜冷短日や低温暗黒などの処理は、株へのストレスがかかり発病を助長するので、入庫前に生育状況を確認し、健全苗を使用する。

(イ) 株冷のコンテナや夜冷庫に苗を詰めすぎないように注意する。

(ウ) 株冷入庫前、陽光処理時のかん水は、過度にならないように注意する。

3 イチゴ(育苗期)のハダニ類

(1) 予報の内容

発生量: 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生株率 9.1% (平年<過去6か年平均> 9.3%、前年 6.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

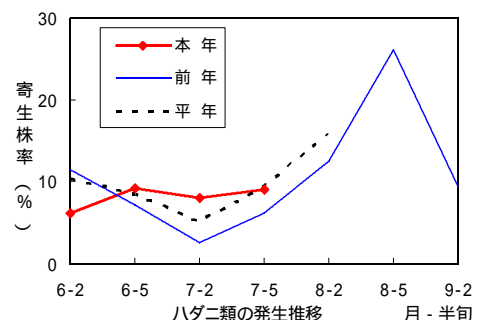
ア 多発後は防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。

イ 摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れ、密封し処分する。

ウ 夜冷短日や低温暗黒などの処理を行う場合は、入庫前に防除を行い、ハダニを持ち込まないようにする。

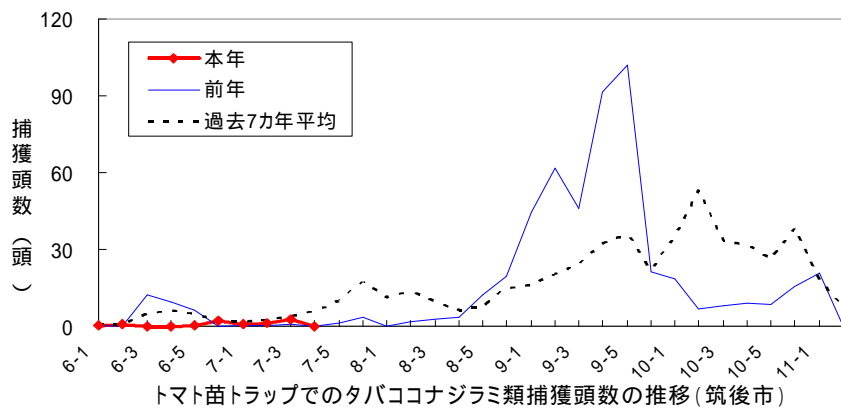
エ 本ほ場で天敵を利用する場合、育苗後半は天敵類への影響が長い有機リン系、カーバメイト系、合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。

オ ほ場内や周辺の除草を徹底する。



【野菜・その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
アスパラガス 斑点性病害	やや少	やや少	並	<ul style="list-style-type: none"> ・過繁茂にならないように摘葉を行い、ほ場内の通風をよくする。 ・多発後は防除が困難となるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。 ・黄色蛍光灯を設置しているほ場では、日没1時間前～日の出後1時間点灯する。
アザミウマ類	やや少	やや少	やや少	
チョウ目 (ハモトウ・材外カ)	並	並	並	
野菜共通 コナジラミ類	やや少	やや少	並	<ul style="list-style-type: none"> ・野外（筑後市）に設置したトマト苗トラップによる捕獲数はやや少である。 ・今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照のこと。



農薬の危害防止に努めましょう ～6月から8月は「農薬安全使用運動」期間です～

福岡県では農薬の使用機会が多い6月～8月を、「農薬安全使用運動」の実施期間として定め、農薬の安全・適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故を防止することを目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を、関係機関・団体が一体となって取り組んでいます。

散布者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

農薬安全使用運動重点啓発事項

散布前に必ず農薬ラベルを確認
(適用作物・使用量や濃度・使用時期・総使用回数)

散布時には近隣作物や住宅街への飛散防止を徹底

- ・ 風、散布方向、散布時間、散布圧に留意
- ・ 飛散しにくい農薬(剤型)や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用
- ・ 散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意

水田除草剤や本田粒剤では、使用後7日間の止水を遵守

- ・ 水田において農薬を使用するときは、散布後3～4日間たん水状態を保持、散布後7日間は落水・かけ流しをしない

散布後は必ず散布器具(タンク、ホース等)を洗浄

防除履歴の正確な記帳

- ・ 薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布年月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.pref.fukuoka.lg.jp/soshiki/4704204.html>

電子メール kfok0301@sp.jpjn.ne.jp